

不幸屋

八坂 凜

不 幸 屋

ようこそ不幸屋へ

あなたはどんな不幸をおもとめですか？

どこにでもあのような都会の風景。賑やかな表通りに整えられた街路樹。どこの店もきれいな商品を外に見せつけるように中が一望できる大きなガラスが張ってある。高いビルが建ち並び、そこでも太陽の光を受けたガラス窓が高いところで反射していた。どこもかしこもきらめいていて、きれいで賑やかな印象を持つ街は、その一方、そのイメージを構成する人々が皆一様に疲れた顔を浮かべている。その顔色はまさに灰色で、街のほとんどを覆うコンクリートとあまり変わらない。まるで、人間自身もコンクリートできているようだ。整然と並ぶ街路樹は、車の排気ガスを吸い、どこかくすんだ色をしながら、高いところで照っている陽光を遮り地面の色を濃くしている。

人々は、自分にしか興味がなかった。今街の歩道を歩いている自分が全てで、他のものには一切関心がないかのごとく歩いていた。人々が、他人に興味を持つとき、それは自分が他人と同じかどうかを気にするときだけだった。他人と同じ列に並んでいなければならない。その列からは、誰一人として外れてはいけないのだ。だから人々は身は同じコンクリートの表情で、同じような服をまとって歩いていた。人々だけではない。街路樹も、ビルも、車も、通りのブティックも、オープンカフェも、同じように道に並び、同じような作りでその街に存在していた。それなのに、どれもこれも都会の構成員であることを気にもしていないように、誰とも、何とも関わらず、単独で存在しているようだった。

だから、誰もその存在に気づかなかったのかもしれない。

街を目的地に向かってひたすら歩いている人々は、もちろんビルとビルの間隙の細い道の先のことなど、毛頭考えない。それどころか、ビルとビルの中にそんな道があったのかさえ知るよしもない。というより、知ろうともしない。『それ』を挟んでいる二つのビルでさえも、『それ』の存在に気がつかない。自分がそこに存在するので精一杯で、周りに目を向けることなどしない。そうしないと、人に、物に溢れた都会では自分できえも見失ってしまうからだ。周りを気にしないのではない。できないのだ。

しかし私は『それ』に気づいた。気づいてしまったのだ。

と同時に、『それ』も私に気づいたのだろう。

かくいう私も周りのことなど気にしないふりをした都会の構成員の一人だった。せかせかと早足で歩き、ため息混じりに呼吸をして酸素の少ない通りを歩いていた。ややもすると私が周りの人間を、街路樹を、建ち並ぶビルを灰色と表現したように、私自身も灰色だったかもしれない。その場所を通るまでは、私も周囲のことなど考えもせず、ひたすら目的地へと足を運んでいた。その場所を通るまでは。

その場所を通り過ぎようとしたとき、なぜだか私は歩みを止めてしまった。理由は私にもわからない。けれど、私の足先は『それ』へと向いていた。私は『それ』が存在しているであろう、ビルとビルの中の濃い影から目をそらすことができなかった。

『行きたい。行かなければ。』

その影はあまりに濃くて、その先に何かあるのかわからなかった。しかし私はなぜだか行きたいという思いを強く感じた。それは直感と言うより衝動だった。

『それ』の方へ向かっていくことが、私には良いことか悪いことかわからない。しかし、自分の意思で進みたいような、けれども何かに強制されているような、そんな感覚に襲われたのだ。

(この先に、何かあるというのだろうか?)

心臓はバクバクとうごき、不安と期待がない交ぜになって、その緊張感から私の頬に一筋の汗が伝った。光をさんさんと浴びる都会の中で、その影と対峙することはいささか抵抗があった。しかし次を考える暇もなく、私の足はそこに向かって動いていた。

呼ばれてしまったのだ。

ビルとビルの間は、信じられないくらい狭かった。下を向くことはできなかったが、歩く度にガラスの破片を踏んだときのような、じやりじやりとした音がする。上を向いても、光が差しているのは遙か上の、ビルの屋上近くあたりだけのようで、私が歩いているところまでは光は届かない。だから、先に進めば進むほど、その闇は濃くなっていくのだ。

体はもちろん横向きで進まないといけなかった。それどころか、道幅が靴の横幅分にぎりぎり足りる程度だったので、私自身は横向きで進んでいるのに足は進行方向に向くように体をひねらねばならなかった。歩くのでさえ骨が折れるので、さっきとは違った意味で汗が出た。

そこまでしてこの先に行く理由などなかったのに、私は引き返す気にはならなかった。むしろ、進めば進むほど、何も考えられなくなっていく。そうしてただ黙々と進んでいるうちに、その細い道が、五分ほど進んだところで急に開けた。

ビルとビルの間を抜けると、そこには小さな木造の家屋らしき建物があった。周りは背の高い建物に囲まれて相変わらず真っ暗だったが、不思議とその様子ははっきり見えた。コンクリートが敷き詰められた都会には珍しく、その家屋の周りには土が広がっている。それを踏みしめる度に、湿った土のおいがあたりに広がった。

きっと、これが私を呼び寄せたのだろう。もはやそう考えるより他はなかった。行こうか行くまいか悩んでいる間に、やはり決断よりも早く私の足がその建物へと向かっていった。

入り口へはすぐにたどり着いた。入り口のドアはやはり木造の作りで、所々木が剥げていたり、色が変わっていたりしている。その様子からは、まるで人が住んでいるような印象を受けない。そこには小さな看板がぶら下げられていた。周りと比べてだが、その看板だけ新しい印象だった。その看板には飾られた文字で『ようこそ不幸屋へ』と書いてあった。

不幸屋…？私はいささか不審に思った。この文字そのままを解釈すれば、不幸を取り扱う店と言うことになる。しかし、そんな店があるはずがない。不幸なんて取り扱えるはずがないし、何より不謹慎だ。たとえこれが普通の店で、不幸屋というのがただの店名だとしても、不愉快に思う人は少なくないだろう。しかし、普通の店でないことは私自身が一番よく知っていた。普通の店ならば、こんなビルとビルの際間に建っているはずがない。それに、私は『これ』に呼び寄せられたのだ。そして、その店名の不愉快さ以上に興味を持ってしまったというのも事実である。何の因果でここに来てしまったかは知らないが、来てしまった以上入ってみようと思った。同時に、ビルの際間を見たときと同じ、入りたい、入らなければ、という衝動を再び感じていた。

ドアノブに手をかけて、引いてみた。静かな空間に小さくベルの音が鳴り響く。中は外から見ていたとおりの木造で、入った瞬間に湿った木のおいを肺に感じた。私はそこで立ち止まり、あたりを見回した。入り口を入れてすぐのあたりに一本木の柱が見える。そのもう少し奥には木でできたカウンターがあった。そのカウンターには、よく喫茶店にあるような、回転する丸椅子が数個並べられている。カウンターの隅に黒電話と花が置いてある。あの花はアジサイだろうか。一面木造で暗い茶色の印象があるこの空間に、アジサイの紫色だけが浮いて見える。

カウンターの後ろには木の食器棚がある。食器棚の中には平らな皿やティーカップなどがしまわれているのが見える。さすがに食器棚に張ってあるガラスや食器までは木製とはいかないが。右に目をやれば大きめの木製の茶色いテーブルが三つほど並んでいて、それぞれに木製のいすが四つずつ添えられている。この空間にあるもののほとんどが、あの木独特の暗い雰囲気を出していた。三つ目のテーブルより奥は何も見えない。印象ではなく、実際に日が当たらないために暗いからだ。その奥が続いているのか、いないのかさえもわからない。

なんだ、ただの喫茶店か。店の内装や、食器棚の中にあるものから、私はそう判断した。よくよく考えれば、不幸を売りつける店なんて、そんな物騒なものがあるはずがないのだ。私は今までの肩の力が急に抜けるのを感じた。

しかし、同時に少し残念でもあった。それは、秘密基地を失った少年の気持ちとよく似ていた。今まで未知だったものが、急に俗世間のものに姿を変えてしまったのだ。今まで風船のように膨らんでいた私の冒険心は、みるみるうちに萎んでしまった。

不幸屋なんて仰々しい名前をつけたもんだ。というより、こんな名前で人が来るのだろうか。立地も悪いし。もしかして、この暗さだ、とうの昔につぶれた店なんじゃないだろうか。

私はそう思案した。ともすれば、ここにあまり長くいてはまずいかも知れない。こんな場所だから、人に見つかるようなことはないだろうが、もしそんなことがあったらなんて言えばいいのだろうか。外から見たとき、この家は二階建てだった。もしかしたら二階に人が住んでいるかもしれない。

帰ろう。こんな暗い湿ったところではなく、光を浴びながら灰色に染まっている世界に。私は来た道を引き返すために、くるりと踵を返した。

しかし振り返った先、私が入ってきたドアにもたれかかるようにして、少女がいた。

今まで人の気配などなかったから心底驚いた。少女の前で声を上げるような恥ずかしいまねはしなかったものの、一瞬足がすくんで動かなくなってしまった。

少女は12, 3歳くらいだろうか。長くて黒い髪がよく目立つ。その髪にはこれまた大きな黄色いリボンをつけ、薄紫の上品な着物を着ている。どちらかというとも古風な印象で、おそらくこんなところで見なければかわいらしい子なのだろう。しかし、今は違う。こんな暗い木造の見知らぬ家であつた少女。しかも少女は見た目から推察される年齢とは全く異質な、妖しい笑みを浮かべている。

その少女と目が合ったとたん、私は背筋に悪寒が走った。幽霊だのお化けだののたぐいは今までに一度も見たことがない。信じているかと言われれば、信じていない。しかし、その少女の紫紺の双眸に私自身の姿が映された瞬間、私ははっきりとその少女に畏怖し、直感したのだ。

この子は何かが違う。人とは違う何かだ。

そして感じた直後、私は自分の体から汗が噴き出し、体中の毛穴という毛穴に針を刺されたようなちくちくとした感じを覚えた。

少女は笑みを崩さぬまま、その口元を開いた。

「いらっしやい。」

鈴の音がころころとなるような、女の子らしい声音だった。ただ、少女の声はさほど大きくないにもかかわらず、静かな空間のせいか異様に響いた。

私は彼女に動揺を悟られないようにした。頬を伝う汗をさりげなくぬぐいながら。私は彼女の浮かべる笑みとは違った意味合いのものを、自分の顔に貼り付けるだけで精一杯だった。

「ああ…ここは君の家だったのか。すまないね、なぜだか迷い込んでしまったのだよ。」

そう言うと少女は一層笑みを濃くした。あの妖しい笑みを。そして一步一步ゆっくりと私に近づいていった。私と彼女の距離に反比例するように、私の悪寒が増していった。私の心音の速度が速まる。そしてついに私の目の前に少女が立った。彼女が私を見上げるように目を合わせ、その瞬間にふわりと花の香りが鼻腔をくすぐると、私は体中の震えを隠しきれなくなった。精一杯の笑みを貼り付けることもできず、私の表情は目を見開いたまま固まってしまった。私の心臓は一度大きくドクリと脈打ったかと思うと、今度は恐ろしいほどゆっくりと、しかし大きく鼓動した。自分を守ろうとする本能からか、私は一歩後ずさった。

「良いのよ。あなたは迷い込んだわけではないもの。あなたは来るべくしてここに来た。さあ…どんなものをお求めかしら？」

私は困惑した。少女に何かを求めたとて、ここには何もない。強いて言えば、机と椅子くらいなものだ。ただ、それはここがただの喫茶店であるという前提の上でだ。私の中で、ここが普通の店ではないのではないかという仮定が、再び鎌首をもたげ始めた。私はそれをぬぐい去るように、わざととぼけたふりをして、首をひねって少女に問いかけた。「どんなもの…？そうか、ここは喫茶店だろう？君は店番かな？」

その瞬間少女は今までの笑みをふっと表情からぬぐい去った。代わりに現れたのは、不機嫌そうに唇をとがらせ、腕を組んでいる彼女の姿だった。その姿を見て、私はこちらの方が「普通の」女の子らしいと思った。普通の表情もできるじゃないか。あたりまえだ。この子はただの女の子なんだから。私は少し安堵した。

少女はわずかにきつい目をしながら口を開く。

「ここは喫茶店でもないし、私は店番でもない。私はこの店の店主、紫陽花（あじさい）よ。あなた表の看板を見なかったのね。ここは『不幸屋』。不幸を取り扱っているお店よ。」

私は彼女の言っていることが、理屈ではわからなかった。この子はどう見たって十代前半くらいの女の子だ。そんな小さな子が店の店主？一体親はどうしているのだろう。私は表の看板だって見た。その看板に『不幸屋』と書かれているのもすっかり確認している。しかし、不幸を取り扱っているという意味がわからない。不幸を取り扱ったところで、どうなるというのだ。

しかし、一方ではそう言われた方が腑に落ちている面もあった。やはりこの店は私たちが普段接しているような一般の店ではなかった。私の直感は正しかったのだと。

一瞬のうちにいろいろなことを考えて、ようやく私が発することができた言葉は、とても拙いものだった。

「いや…表の看板は見たけど……不幸屋って…？」

ここは不幸を取り扱っている。

彼女の言葉は、おそらく私がここに来てから私が最も恐れていた言葉だった。理由なんかない。私の心の最深部にしっかりと根を張るように、彼女と、彼女の言葉への恐怖が巣くっていた。

少女はそんな私の様子を、その紫紺で一瞥すると、何かを了承したように独りごちた。「ああ…。そうね、知らないのも想像できないのも無理はないわ。ごめんなさい。ここに来る人来る人に説明してきたからちよっと疲れちゃって。」

少女は私を通り越し、『不幸屋』の奥を進んだ。彼女との距離が遠くなるにつれて私の体も落ち着きを取り戻していった。彼女は四、五歩ほど歩いたところで辿り着いたカウンターの椅子に腰掛け、くるりと私に振り向いた。部屋の闇が濃くなったように、私には思えた。

「いいわ、改めて…。ここは不幸屋。私はこのお店の店主の紫陽花。ここは不幸を求める人が自らの意志でやってくる場所よ。だからあなたは迷って来たんじゃないの。ここに不幸を求めて必然的にやってきたの。」

冗談じゃない。誰が不幸を求めてるって？不幸になりたい人間なんてどこにもいやしないだろう。私だって同じだ。だから私は彼女…紫陽花の言葉を否定した。

「私は不幸はいらないよ。間に合ってるんだ、そんなもの。第一誰が好きこのんでそんなものをほしがる？」

紫陽花は先ほどと同じ笑みを再び浮かべた。その瞬間、全てが見透かされたような感じがして、私はぞっとした。

「間に合ってる…ね。確かにそうみたい。あなたは自分自身の不幸は必要としていないよね。むしろ、あなたが欲しているのは他人の不幸。そうじゃないかしら？」

私はゴクリとつばを飲み込んだ。その音が部屋中に響き渡ったような気がした。私の喉が急激に水分を失っていく。紫陽花は私のことを知っているかのような口ぶりだった。いや、そんなはずはない。さっきまで、私はこの少女に会ったことがなかったのだから。紫陽花に対する畏怖が、私の中で強まっていく。しかし、紫陽花が私のことを知っているのではないかという不気味さと、拠り所を見つけたときのような安らぎの両方を感じるのも事実だった。とても信じられないのではあるが。

そんな風に逡巡している私を意にも介さず、紫陽花は続けた。

「ここに来るお客さんは不幸を求めにやってくるわ。それも自分自身の不幸をね。最近結構多いのよ、お客さん。でも…あなたは違うのね。珍しいお客さんだわ。」

ふふふと笑う紫陽花。その側で、花瓶に挿してあるアジサイの花がちらりちらりと視界に映る。

そういえば、いまは、アジサイの咲く季節だったろうか……？

やはり紫陽花は私のことを知っているのだろうか。だとしたら、どれほどのことまで？ 私の背筋はぞわぞわとした感覚が走っている。腕にできた鳥肌が治まらない。ここから離れなくては。そう思うのに、体はいっこうに動かない。それどころか一方で、私は彼女の話に惹きつけられてさえいたのだ。

カウンターのアジサイだろうか。そのにおいが鼻につく。しかも、紫陽花が笑うとそのにおいは一層濃くなるような気がした。

アジサイとはこんなにもにおいがする花だったろうか？ 私はくらくらとした。

ビルの隙間を見たときのように、しかしその時とはまた別種の衝動を感じていた。アジサイの香りに、この不幸屋の雰囲気身をゆだねてしまっても良いのではないだろうか。いや、身をゆだねたい。

そんな私の欲望を見透かしたかのように、紫陽花は上目を使って私を見ていた。「いいわ…。あなたに不幸を売りましょう。そうね、私が今まで不幸を売ってきた人たちの話なんかどうかしら？ さあ、座って頂戴。物語を始めましょう。」

紫陽花は、カウンター裏へと進み、ぱちりと天井にある明かりのスイッチを入れた。それでもこの空間全体が光に照らされるほどの明るさはなかったが。

ほおづえをついて私を見つめる紫陽花の様子は、私を誘い込む大きな罠のようにも見えた。

私はもう、自分の衝動に抗うことをやめた。そうすると、不思議と紫陽花に対する恐怖心もなくなっていった。

私はこの部屋と同じ、ほの暗い気持ちを抱えながら、今度は自分の意思で彼女に近づいていった。私は口元に笑みを引いた。この場にいる少女と同じ、怪しい笑みを浮かべていると、自分でも感じた。しかし、自分の瞳は笑みを浮かべる余裕がなかった。ぎらぎらと輝き、一点を見据えている。私の心臓は再び速まっている。しかし今度は先ほどの鼓動のはやさとは意味合いが違った。体中の震えも、背筋のしびれでさえも、今までの不愉快さとは違う、一種の歓喜を感じていたのだ。私の血は一步進むごとに沸き立つようだった。

それは、静かな興奮だった。

そして、私は自分の体がカウンター席の椅子に座るのを感じた。

彼女の話が聞きたい。私は切にそう願った。

彼女に近づいたとき、光に当たった紫陽花の髪が漆黒なのではなく、限りなく黒に近い紫であることに気づいた。

カウンターのアジサイの花びらが、ひらりと落ちた。

可哀相に

可哀相と言われるのがきもちよくて
可哀相からぬけ出せなくなったのね

1 溺レル者ハ藁ヤハム

「今日も仕事なの？土曜じゃない。」

鳴瀬の妻が非難するように言った。鳴瀬はそんな妻を振り返ることもせず、靴を履きながら答えた。

「今日は野球部の試合があるんだ。遠征に付き添わなきゃいけないんだとさ。」

鳴瀬は中学校の部活動のためだけのジャージを身にまとい、買ってから片方の手で数えるほどしか履いていないシューズの靴紐を縛り上げていた。しかし、太い指と、今年の間人ドックで医者から注意を受けた脂肪の多い上半身のせいで靴紐を結ぶことはおろか、腹より下を見ることも辛い。妻はそんな鳴瀬を手伝うこともせず、鳴瀬の三歩後ろに立ち、冷たい目で彼を見下ろしていた。

「でも、今日は美佳の新学期の準備に買い物に連れてってくれるって言ったじゃない。」

美佳は鳴瀬の娘である。今年で小学校5年生になる美佳は、妻の見方ばかりして最近では鳴瀬に近づこうともしない。自分の娘でありながら、鳴瀬自身も美佳との付き合いに困りあぐねて、積極的にかかわろうとしなかった。

「仕方ないだろ。山辺先生がついこの前まで教えてくれなかったんだ。急に決まったらしい。それに…俺だってやりたくてやってるわけじゃないんだ。」

妻の相手は疲れる。それでなくても今日は野球部の引率で疲れるんだ。朝からキイキイと喚かないでくれ。

「急になって…それでも昨日教えてくれてもよかったじゃない。」

鳴瀬はやっと右足の靴紐を結び終えた。けれど、その蝶結びは何とも不格好で、足の向きと平行になってしまっている。鳴瀬はふう、と一息ついた。

「いいじゃないか。どうせ俺たちで行くって言っても美佳はついてこないさ。俺たちが勝手に買って来た物なんか使いやしないよ。」

だんだんと論点がずれていく二人の喧嘩は、互いに互いをいらいらさせるだけだった。

鳴瀬は、わざわざ振り返ってみなくても妻がどんな表情をしているか、はっきりとわかった。やっと両方のひもを結び終え、よっこらしよとばかりに立ち上がる鳴瀬に妻が誹謗の声を上げた。

「そういうことを言ってるんじゃないでしょ？何であなたは急に約束をすっぽかすの？教育者としてどうなわけって言ってるの。」

「うるさいな。女がぐだぐだ言うんじゃない。そこを何とかするのが妻の務めだろう。」

「そんな務め、知らないわ。」

「この家で飯食ってられるのは誰のお陰だと思ってるんだ。とにかく、もう行ってくる。」

背中を向けて玄関の戸を開ける鳴瀬に、妻は一瞥くれてやっただけで、それ以上彼を見送ることもなくリビングへと去って行った。その背中にいつてらっしゃい、と声がかかったのはもう何年もない。

まったく。俺だってこんな土曜の休みだっなのに駆り出されるなんてごめんだ。部活のために教師なんてやってるわけじゃないんだ。あんな弱小チーム、好きこのんで顧問なんかするのは山辺先生くらいだ。そうだ、俺は山辺先生に捕まっただけなんだ。無理矢理やらされてるんだ。なのに、なんだあの妻の言いようは。

いらだっている様子で鳴瀬は道を歩いた。

大体なんだ。買い物くらいで騒いで。こっちは家のことじゃない。学校、仕事のことで出かけるんだ。ねぎらいの言葉一つあっても良いじゃないか。

最近鳴瀬と妻はこの調子だった。互いに口を開けば出てくるのは文句ばかりで、今日のように鳴瀬が出かける間に口げんかするのも、鳴瀬が出発を口実に妻の攻撃から逃れるのも珍しいことではない。妻のように口の回らない鳴瀬は、後からこうして心の中で一人愚痴をこぼすことになる。

目的地である中学校は自宅から徒歩10分もないところで、家を出て不満が収まらないまま鳴瀬は到着してしまう。

校門をくぐるとユニフォーム姿の生徒が数名いた。それが野球部のユニフォームだということは鳴瀬にもわかっているが、普段あまり部活動の面倒を見ることのない鳴瀬にとって見慣れた物ではない。同じ衣装を複数人が身にまとっている中で、一人異なる格好をしている鳴瀬は、何となくいたたまれないような気分になった。

鳴瀬を見るなり、生徒たちはぎよつとした顔をした。

「は……は一ざいますっ。」

野球部独特の、しかし礼儀正しいあいさつが生徒たち各々の口からばらばらに出てくる。けれど表情は硬く、明らかに鳴瀬を受け入れていない様子だった。

「おはよう。」

その様子を鳴瀬も察したのか、小さく素っ気ない返事を返すと鳴瀬は生徒の群れから少し離れたところで遠征に行くために乗るバスを待った。

「おい、あいつ来たのかよ。」

「なにすんだよ。オヤジの癖して野球なんかろくすっぽ分かんねえのに。」

「あいつがいたところで、邪魔なだけだろ？」

離れてはいるものの、生徒たちが話していることは聞こえてくる。もしかしたら、わざと聞こえるように言っている輩もいるかも知れない。名ばかりの副顧問なんてそんなものだ。また部活だけでなく学校内でも、鳴瀬は特別目立つような教師でも有能な教師でもない。雰囲気で分かるのか生徒たちは教師同士の評価を敏感に感じ取る。他の教師は自分に対する評価を黙っていても、生徒たちはその感じ取ったものを言葉に表す。子供というのは感受性が豊かな分、残酷だ。

「おお、みんな早いな。」

車のエンジン音が聞こえ、鳴瀬は我に返った。その運転席のドアを開け出てきた山辺がさわやかに生徒たちにあいさつした。山辺は鳴瀬と違い、野球部のユニフォームを着ている。その肩にはバットやボールなどといった野球の道具がまとめて背負われている。

「は一ざーます！」

「は一ざいます！！」

野球部の部長のあいさつに続き、他の部員が声をそろえてあいさつした。

「ああ、おはよう。」

山辺を中心に生徒たちが学年順にきれいな同心円状の半円を描いて並ぶ。内側にいくほど高学年になっている。しかし鳴瀬はその同心円の外側で立っていることしかできない。山辺は、両手を後ろに組み自分を見上げて一人一人を見上げると、よし、と小さくつぶやいた。

「全員いるか？隣のやつでいないやつはいないか？よし、みんないるみたいだな。」

生徒を見る山辺の表情も、山辺を見る生徒の真摯な表情も、どれもさわやかだった。鳴瀬は無意識に、肥満体型の、脂ぎった腹をぽんとたたき、大きく息を吐いた。

「よーし。みんないい顔をしているな。今日は貴重な試合だ。練習試合だからって気を抜くなよ。スタメンは各自大会に向けての調整だと思ってくれ。」

大型のバスが校門をくぐるのが見えた。それはまっすぐこちらへと向かって緩やかに走ってきた。そして、山辺と生徒の前に停まった。その中から鳴瀬ほどとはいかないものの、小太りの中年が降りてきた。それを見た生徒の一人が、誰よりもいち早く反応した。

「は一ざいます！」

「は一ざいます！！」

残りの生徒もそれに応じて中年に挨拶を返す。上がる声と下げられた頭の位置やタイミングに、一寸の狂いもない。

「お願いします！」

「お願いします！！」

一連の挨拶が繰り返されたのち、生徒たちは再び山辺の方に向き直って両手を後ろに組んだ。山辺は生徒の様子を見て満足げに頷いた。

「よし。じゃあ三年生からバスに乗れ。大きい荷物は積んでもらって。貸し切りバスだからってはしゃぎすぎるなよ。」

はい、と生徒たちから返事が上がる。そして同心円の内側から順に生徒たちがバスの乗り口に向かっていく。一人一人がバスに乗る際も、おねがいます、といいながら中年に頭を下げて乗り込む。山辺はその生徒の様子をしばらく眺めた後、バスの乗り口に立っている中年に歩いて行った。

「運転手さん、今日はよろしくお願いします。」

そう言って山辺は運転手に頭を下げる。運転手はにこやかな顔をして山辺に頭を下げ返した。

「いえいえ、こちらこそ、よろしくお願いします。いやあ、きょうは天気がよくて何よりですな。生徒さん方も、張り切って試合できるでしょう。」

「ええ。おかげさまで。生徒たちも張り切ってますよ。もうすぐ大会ですし。」

「そうか。もうそんな季節なんですかあ。」

「はい。大会の時期になったら、またよろしくお願いします。」

山辺は再び運転手に頭を下げる。例によって、運転手も山辺に向かって腰を曲げた。

「いえいえ、こちらこそ。こちらの生徒さんなら、大歓迎ですよ。」

頭を上げた運転手は、礼儀正しくバスに乗り込む生徒の列を眺めた。しばらくして、しかし、とつぶやくように続けた。

「こちらの生徒さんはいつも礼儀正しい。あるべき若者の姿といった感じですね。いやいや、私もいろいろなところにバスを回してますけど、ここまで礼儀正しい方々はなかなかいない。大人でさえこうはいきませんな。これも、先生のご指導の賜物でしょう。」

運転手のその言葉を聞いて、山辺はその白い歯を見せつけるようにして笑った。わずかに上体を反らせ、自信に満ちた声で山辺は答えた。

「いえいえ。生徒が素直な良い子たちなんです。私なんてまだまだですよ。生徒から学ぶことも多いし。それに教師という仕事でもまだ若輩者ですから。だから、今日は顧問としても、教師としても生徒をきちんと引率できるように、副顧問の鳴瀬先生にも来て頂いたんです。」

山辺はそう言って、少し離れたところにいる鳴瀬に視線を向けた。その視線につられて、運転手も鳴瀬を見た。離れた鳴瀬には運転手と山辺の声は聞こえず、ただ、運転手が首をかしげるのだけが見えた。

「ほう。あの方も引率の先生でしたか。いやいや、いままで見たこともない先生でしたから。着ているものも違いますし、てっきり保護者の方かと。」

「はは。彼は副顧問ですからね。おっと、生徒たちが乗り終わったようですね。それではよろしくお願いします。」

山辺は片手を口の横に当てると、そのよく通る声で鳴瀬を呼んだ。

「鳴瀬先生！早く乗りましょう。」

鳴瀬は山辺の呼びかけに気づくと、のろのろとした調子でバスに向かった。

バスの乗客は、鳴瀬で最後だった。どこもかしこも座席は生徒で埋まっており、鳴瀬はどこに座ったものか迷ってしまった。

「鳴瀬先生、ここあいてますよ。」

鳴瀬が立ち尽くしていると、右側から声がかかる。その声は紛れもなく山辺の声だった。山辺は顧問らしく座席の一番前を陣取っていて、鳴瀬にその隣に座れと言っているのだ。

仕方なく鳴瀬は山辺の隣に座る。はあ、と大きなため息をつきながら。

「お休みの日にすみません。今日はよろしくおねがいしますね。」

「ああ。」

山辺の言葉に鳴瀬が短く返事をする。鳴瀬はそれ以上答えることもなく、目を瞑ってしまったため、山辺も何も言っはこなかった。

おきて。おきて。

そう声が聞こえた。

バスの揺れのせいか、目を瞑っているうちに、鳴瀬は眠っていたらしい。誰かに起こされるような声を聞いて、鳴瀬は目を覚ました。

最初は目的地に着いたために、山辺が起こしたのかと思った。しかし、バスはいまだ川原沿いの道を走り続けている。それにおきて、という声は鈴が鳴るような甲高い声だった。

夢でも見たのだろうか。鳴瀬はさっきまで聞こえていたような声を思い出しながらぼうつと窓の外を眺めていた。いやにはっきりとしていたその声は、寝ぼけた鳴瀬の頭の中で何度も何度も繰り返された。ころころとしたかわいらしい少女の声だった。声の様子から察するに年のころは鳴瀬の娘と同じくらいだろうが、聞こえた声に心当たりはない。鳴瀬の妻の声とも、娘の声とも違った。野球部は男ばかりだし、女子マネージャーもない。しかし、いやにはっきりと覚えている。まるで、耳元で誰かがささやきでもしていたかのように。

そうして声のことを考えている間も、バスは進んだ。川原沿いの道を左に曲がり、橋を渡る。練習試合を行う場所は、市街地から離れた学校のグラウンドで、田舎の道は眺めていてもたいした変わりはなく、おもしろくもない。建物も、あるとすれば川原に建つ古ぼけた洋館くらいだ。

川原に建つ、洋館？

目の端に見ていた光景に、鳴瀬は疑問を感じた。川原に建物など、建てるだろうか。橋の下に広がっていた川はそれなりに広く、数十年前までは大雨が降るたびに氾濫していた。それゆえ、川の両端には氾濫を防ぐための堤防がしっかりと施されている。成瀬が見たような気がした洋館は、その堤防と川の間建っていた。川原の大き目の石が転がる中に立っていたそれは、すこし長雨が続けばすぐさま川の流れにさらわれてしまうだろう。いったい、そんなところに誰が家を建てるというのだろうか。それに、この道は鳴瀬だって知っている道だ。市街地からは離れた道といえど、このあたりは鳴瀬が育った市の中にある。あんな古ぼけた建物は、このあたりに建っていただろうか。いや、ないのだ。子供のころから見慣れてきた光景の中には、この川はあってもこの川に沿うようにして立てられた洋館などない。

きっと見間違いのはずだ。

鳴瀬はそう思った。しかし、鳴瀬が建物をしっかりと確認する間もなく、バスは鳴瀬と建物を引き離した。バスは橋を抜け、もうすぐ目的の場所に着く。その道のように、ところどころ田畑が建物になっているなどしているが、鳴瀬の子供のころからほとんど変わらない、よく見慣れた道だった。それでも、鳴瀬は自分の胸に沸き起こった違和感をぬぐいきることができなかった。

きっと寝ぼけていたに違いない。そのせいで、見間違えたに違いない。

鳴瀬はそう思うことにした。そう思うことにして、心の平安を保とうとした。そして、鳴瀬の心に魚の骨のようにひっかかった何かを、忘れることにした。

「菊池一！走れ一！」

山辺の叫ぶ声がある。山辺の声援にこたえるように、生徒も必死になって走っている。それ以外の生徒も、精一杯チームメイトを応援するために声を張り上げている。試合に出るためにいる生徒も、応援のためだけにいる下級生も、みんな一生懸命だ。山辺と生徒たちの中で、ものすごい一体感が生まれていた。

しかし、鳴瀬はその一体感の中に入ることはできなかった。鳴瀬はひとり離れたベンチに座っていた。タオルを目にかぶせて、山辺と生徒たちの声を遠くで聞きながら、眠ったふりをしていた。けれど本当に眠ることはできなかった。さっきバスの中で寝ていたせいもあったし、タオルをかぶっているといえど日差しが明るく眠れるような状況ではないせいでもあった。けれど、一番は、この状況が鳴瀬にとってひどくつまらないせいだった。

たかだか練習試合じゃないか。

鳴瀬には生徒や山辺が一生懸命になって部活を盛り上げることが理解できなかった。野球のこともわからなかった。普段は何もかかわりが無いし、こうやって練習試合に参加したとしても何をすればいいのか、自分の役割がわからなかった。わからないのに、副顧問をやらされるのが面白くなかった。だから、理解することを拒んでいたのだ。

そうしているうちに生徒とたちからも敬遠されて、鳴瀬は野球部という名の同心円からひとり取り残されることになった。けれども、生徒たちが離れていったのではない。野球や部活などつまらないから、自分から離れてやるのだ。鳴瀬はそう思うことにしたのである。

「おひまですか。鳴瀬先生。」

鳴瀬に声をかけたものがいた。山辺の声だと、すぐにわかった。鳴瀬は物憂げに自分の顔にかぶせたタオルを取り上げ、山辺をみた。

「授業で使う資料を作るんで、昨日夜遅かったんです。すこし寝不足なだけです。」

それは、寝ているから自分にかまうな、と暗に山辺に告げる意味だった。そうして鳴瀬はタオルをふたたび顔にかけ上を向いて、大きく息を吐いた。太い足を一生懸命組もうとしてみたが、ようやく組みあがった足はすぐに地面に落ちていった

「そうでしたか。成瀬先生も大変ですね。そうだ、近くの自販機で生徒たちに飲み物を買ってきていただけませんか。成瀬先生の目もさめるだろうし。」

なにが、そうだ、だということか。先輩教師を遣いにやるものがどこにいるというのだろうか。

成瀬は憤慨した。しかし、鳴瀬よりずっと年下だということに、成瀬は山辺に逆らう度胸などなかった。鳴瀬はふたたびゆっくりと顔の上のタオルを取り上げた。そうしてけだるそうに立ち上がって山辺を一瞥すると、山辺に背を向けて歩き出した。

「いつてらっしゃい、成瀬先生。どうぞお気をつけて。」

背中から、山辺の声がした。